

平成26年度学校評価（年間評価）

学校名 大分県立佐伯支援学校

前年度評価結果の概要	<p>○組織的なキャリア教育による一般就労の促進では、PTA・ゆとり参観日において進路に関する研修会を設定したが、積極的な広報・啓発を行うことで、70%以上の保護者が参加する研修会を2回実施することができた。また、高等部3年生の進路先で一般就労3名、就労継続支援A型2名（見込みを含む）の生徒を輩出することができた。</p> <p>○専門性の高い教育の実践では、合同授業や指導案作成、互見授業期間の設定、学校外のメンテナンス作業の実施等で授業改善を進め、全学部を通じて保護者の授業評価での満足度92.5%を達成することができた。</p> <p>○地域に開かれた、安全・安心な学校作りの推進では、避難訓練において第1避難場所への全員の4分以内の到着が達成できた。また、市内の高等学校へ巡回相談に関するチラシを配布することで市内の高校3校から巡回相談申請が20件を越え、個々に対応した。</p> <p>○来年度以降も組織的なキャリア教育を進めるために、「卒業生を招いての懇談」「就労現場の見学や学部・学年に応じた進路学習」「全学部対象のメンテナンス校内検定」などを実施していきたい。また、卒業生が進路先に定着できるように関係機関と連携しながら定期的な追指導・支援を行ってきたい。</p> <p>○専門性の高い教育の実践では、学部間交流授業研究、互見授業などで指導案を作成し、参観及び授業後の意見交換をする中で授業改善に取り組み、今後も専門性の向上を図ってきたい。</p> <p>○地域に開かれた、安全・安心な学校作りのために、避難訓練では、高等部と中学部がそれぞれ行っている第2避難場所までの日常的な移動訓練の継続、小学部児童が安全かつ迅速に避難できるための高等部教職員のサポート、非常用食料と飲料水の迅速な持ち出しと運搬への対策などを進めていきたい。</p>
------------	--

学校教育目標	中期目標	重点目標
基本的人権を尊重し、児童生徒の教育的ニーズに応じた適切な指導及び必要な支援を行い、自立し社会参加することをめざし、豊かでたくましい心身と自ら生きる力を培う。	<ol style="list-style-type: none"> キャリア教育の充実 健康・安全教育の徹底 学力保障 特別支援教育の専門性の活用と同僚性の発揮 	<ol style="list-style-type: none"> 小中高一貫したキャリア教育の推進 <ol style="list-style-type: none"> 基本的生活習慣の育成 人間力の向上 健康や体力の増進並びに安全教育の推進

重点目標	達成（成果）指標	重点的取組	取組指標	PL SL	自己評価結果		次年度の改善策	学校関係者評価
					評価	分析・考察		
1 小中高一貫したキャリア教育の推進 (1) 基本的生活習慣の育成	<p>基本的生活習慣の確立（保護者・教職員へのアンケートの実施） → 100%</p> <p>○自分から進んであいさつをする（自分なりのあいさつのサインを用いる）児童生徒の育成。</p> <p>○自分から清潔に気をつけて生活する（気持ちのよい環境を感じ取ることが出来る）児童生徒の育成。</p> <p>○時刻を意識して5分前行動をする（皆とともに行動しようとする）児童生徒の育成。</p>	<p>・あいさつ ①時と場に応じたあいさつを身につける。</p>	<p>①全校集会や登下校時に児童生徒会を中心にあいさつ指導を実施する。</p>	PL 生徒指導主任	3	<p>・言葉や身振りサインなど児童の実態に応じ、その都度挨拶ができるように取り組んできた。教師がすすんで挨拶することで自分から挨拶できる児童が増えてきた。(小)</p> <p>・バス降車時から生徒を出迎えて、朝一番のあいさつ指導を積極的に行った。自分から相手の顔を見てあいさつできる生徒が増えた。朝の会などでその都度教師が気がついたときに指導するようにしたことが効果的であった。校外に出るときは、訪問相手への礼儀として指導。(中)</p> <p>・朝のスクールバスの降車時等の日常生活の中で言葉かけや、「職業」などの授業において「社会生活を送る上で必要な力」として位置づけ、挨拶指導に取り組んだ。その結果、自分から挨拶をする生徒が多くなった。(高)</p> <p>・清掃場所や時間などを決めて取り組むことで掃除への取りかかりが早くなった。(小)</p> <p>・清掃時間が少ないので効率よくできるように、自分の清掃区域を確実にできるように、清掃手順が進んだ生徒が保健室掃除をするようになった。学部以外の教職員とかかわることで、コミュニケーションの向上にも役立っている。(中)</p> <p>・高等部棟および管理棟（玄関・校長室）の清掃を清掃分担・監督を決めて、清掃活動に取り組んだ。高等部全体に清掃区域・監督を示すことで、昼休みの清掃活動に対する意識を高めることができた。(高)</p> <p>・全学部参加の校内検定（小中学部：テーブル拭き、高等学部：テーブル拭き・自在ぼうき）を実施した。高等部教員による小中学部での交流授業や中学部の生徒が高等部の授業に参加する取り組みによって検定への意欲が高まると共に、日頃の清掃（テーブル拭きなど）に対する意欲も高まってきた。(高)</p> <p>(小学部53%、中学部70%、高等部88%)</p> <p>・児童に対して早めの言葉かけをするに取り組んだ。また、友だちを待って一緒に行動することにも取り組んできた。(小)</p> <p>・前もって集合時刻を設定し、生徒一人一人に対応した指導で伝えるようにしている。(中)</p> <p>・授業規律（始業時刻を守る。勝手に発言しない。話を聴く。立ち歩かない）を決め、教室に掲示した。「始業時刻を守る」については、約90%の生徒が守れている。(高)</p>	<p>・挨拶ができたときには大いに褒めるなど、自分から挨拶できるように工夫する。さらに担任教師以外にも挨拶ができるようにする。(小)</p> <p>・教職員や友だちへのあいさつを大きな声ではっきりと相手を見てできるようにする。(中)</p>	<p>・挨拶は、実際見ると、児童生徒一人一人が意識をして、きちんとできている。佐伯支援を訪れた知り合いからも、佐伯支援の生徒の挨拶のすばらしさを聞いた。</p> <p>・「あいさつ」「清掃」「時間を守る」の基本的な事項3つは、大切だと思う。今年度限りにならないで、継続して取り組んでもらいたい。</p> <p>・清掃の意識づけができていたため、自宅に帰ってきて、お風呂などのそうじを、するようになった。学校で身につけたものが家庭生活に活かされている。</p> <p>・校内検定の練習では、高等部の生徒が小中学部の児童生徒に指導をしている。先輩が後輩に教えて育てていく、すばらしい取組がある。子どもたちどうしでお互いの力を引き出し合っている。このような取組が、本来の学校教育であると感じた。</p>
		<p>・清掃 ①個に応じた方法で清掃技術の向上を図る。</p>	<p>①昼休み全校一斉の清掃活動を行う。 ②高等部によるメンテナンス作業の出前授業に取り組み、全学部対象の校内検定を実施する。 ③メンテナンス作業の方法を取り入れた日常の清掃を実施する。</p>	PL 生徒指導主任			3	<p>・生徒会の委員会活動など、全校のリーダーとして全校生徒に働きかける活動をとおし、より挨拶することの大切さを理解し、自ら進んで挨拶をする意識が根付くように指導する。(高)</p> <p>・雑巾の絞り方や箒の操作の仕方など、道具の扱い方を身につける指導を繰り返し実施。(小)</p> <p>・生徒1人1人に清掃区域を決めて取り組み清掃手順の指導や始めや終わりの報告ができる体制を作る。(中)</p> <p>・校内検定前などに高等部生徒・教員による交流授業を実施して、清掃技術の向上や日頃の清掃活動への意欲を高める。(高)</p>
		<p>・時間を守る ①時間を守って行動する。</p>	<p>①5分前行動のことばかけと、教師が率先垂範する。</p>	PL 生徒指導主任			3	<p>・言葉かけを少なくし、少しでも自分から行動に移れるような働きかけを工夫したい。(小)</p> <p>・時間を守る態度や自分から時間を考えて行動できるように時計を意識する取組を繰り返し実施する。(中)</p> <p>・毎週金曜日に振り返りの時間を設け、自分の決めためあてや授業規律が守れているかの確認をする。(高)</p>

重点目標	達成（成果）指標	重点的取組	取組指標	P L S L	自己評価結果		次年度の改善策	学校関係者評価	
					評価	分析・考察			
1 小中高一貫したキャリア教育の推進 (2) 人間力の向上	○保護者からの授業満足度 100% (保護者へのアンケート実施)	・教師力（職務上必要な能力）の向上並びに同僚性の発揮 ①互見授業期間を設け、授業改善を図る。	①互見授業では、授業点検チェックリストをもとに授業改善をおこない、相互の授業力の向上を図る。	P L 教務部 研究 S L 教務主任	3		・6月～7月にかけて、小学部が3回、中学部が3回、高等部が1回互見授業を実施した。学部内で、教材の工夫や指導の進め方の見直しを行い、さらに共通理解を深めることができた。1月～2月にはインフルエンザ等の影響があり、期間を延ばして1ヶ月間を互見授業期間として、他学部の授業観察をするようにした。その中で、授業後の意見や感想を授業者に伝えて、意見交流することができ、授業改善に役立てられた。 ・各学部の研究グループごとにテーマ設定をして、11月の特定授業、公開授業を中心に授業研究を行った。対象児童生徒の「支援の方向性」を具体的に授業に生かすため、授業における場面設定、教材教具、教師の働きかけ等を検討して、授業検証をすることができた。	・3学期に互見授業を実施する場合には、インフルエンザなどの流行を考慮した実施に努めなければならないため、互見授業の時期設定については、できるだけ早い時期が望ましいと思われる。	・あいさつをはじめとして、コミュニケーションの力を伸ばし、できないことはたくさんあっても、周りの人たちに愛される存在であってほしい。方向性に賛同する。これらの取組を継続発展させてほしい。
	・コミュニケーション能力の育成（接遇・会話力・表情・間の取り方・メタ認知等） ①学校の全教育活動を通じて児童生徒のコミュニケーション能力や働く意欲を育てる。	①小学部は、朝の会での日付や天気のお知らせ、自立活動の授業などで「自分の意思を伝え、相手との関わりを深めたいという意欲」を育てる。 ②中学部は、国語でインタビュー形式での取材や作業学習での販売の注文取り等の授業をとおして「どうすれば相手に伝わりやすいかを考えたり行動したりする力」を育てる。 ③高等部は、職業や特別活動の授業で、接客サービスの態度や方法を学び、その実践の場として学期に1回ずつ「喫茶風の子」を実施する。	①隣接学年で集団をつくり係の役割分担をして、個に応じたやり方で取り組んできた。自ら進んで係り仕事に取り組んだり、自分から言葉を発したりする姿が見られた。(小) ②国語で、修学旅行に参加した上級生に対して、見学地での感想や出来事を取材し、取材メモを活かして壁新聞づくりをした。農業では、収穫したジャガイモとタマネギの注文をとって販売する活動に取り組んだ。注文取りの手順について考え、その手順表を見ながら注文取りを行うことができた。今後は他学部の教員に注文をとったり、手順表を見ないで注文をとったりする活動も取り入れたい。帰りの会、生徒たちの「今日の発表」コーナーで質問をお互いに行うことが社会見学の見学地での質問活動につながっていった。(中) ③卒業後の進路先を具体的に考えられるように進路学習を中心に取り組んだ。企業・事業所が求める人材像を常に意識させながら、あいさつや接客練習を行った。接客サービスの実践練習の場である「喫茶風の子」を1学期と3学期に実施した。(高)	P L 進路指導主任 S L 各学部 主事			3	①自分の役割を理解して行動したり、友だちの話を聞いたり友だちに伝えたりする力を、朝や帰りの会などで育てていく。(小) ②毎日の学部合同の集会（朝の会、帰りの会）で生徒が楽しめたことや気がついたことを発表し、そのことへ質問し合うことでコミュニケーション能力を高める。(中) ③今年度は高等部全学部での一斉授業の形態をとってきたが、学年ごとの課題や目標等を明らかにしたうえで、次年度は学年ごとの授業を基本として進める。(高)	・「喫茶風の子」で接客を体験することは大切。おもてなしの心があれば、対人関係はとても良好になる。 ・佐伯管内福祉事業所を集めての情報交換会は、すばらしい企画であった。福祉の方からも情報を発信してきたつもりだが、伝わっていないことが多い。このような情報交換の場が大切である。 ・進路に関する保護者への研修は、所属学部によって意識の温度差が大きいと感じる。「そのうち制度が変わるかも」と思っている保護者もいる。小学部なりの進路指導の保護者研修のありかたもあると感じた。 ・就労後3年の壁がある。離職を防ぐためのシステムをどのように作るかを、今後の課題とするとよい。佐伯支援の先生方が夏季休業中に、就労先に職場体験研修として行き、共に働きながら追支援をすることは意義深い。卒業生も嬉しいだろう。 ・同窓会という場があり、近況報告を聞くことは大切である。頑張っている様子を知ることは、在校生の指導に反映させるためにも意義深い。
	○高等部3年生の実態に応じた進路先保障の充実。 (全生徒の進路先を決定) ○卒業生の就労先からの離職ゼロ。(5/11人) ○同窓会の組織の再設立し、同窓会を1回開催。 ○同窓会規約を改定し、全卒業生に配布。同窓会入会式を今年度卒業式前に実施。	・つながりあう力（連携力）の育成 ①関係機関との連携を図りながら卒業生への追支援をおこない、就労先への定着を図る。 ②同窓会組織の充実を図る。	①関係機関との情報交換を、保護者、学校の三者で実施する。 ②進路指導部を中心とした就労先への追支援を定期的実施する。	P L 進路指導主任 S L 教育相談主任			4	①初の試みとして、佐伯管内全福祉事業所を招集しての情報交換会、また保護者を対象とした福祉事業所を知るための学習会を実施した。加えて一般就労に係る関係機関との連携協議会を就労先企業やハローワーク等を招集し実施した。今春一般就労した卒業生を講師に招き、進路講演会を実施した。 ②障害者就業・生活支援センターと連携しながら、定期的な追支援並びに情報交換をおこなった。また、夏季休業中に職員の職場体験を卒業生の就労先で追支援の意味も含めて実施した。結果、離職者はゼロであった。 ③同窓会規約を改定するなど、組織と会則の整備を行った。同窓会交流会を計3回行い、保護者を含め延べ40名以上の参加があった。 ④同窓会規約を見直し、全卒業生に配布した。	①次年度3年生が14名在籍しており、全員の希望する進路を達成するためには、更なる関係機関との連携が必要である。 ②全国的にも就労してから3年以内の早期離職が問題となっている。障害者就業・生活支援センターとの連携を密にし、本校独自の定着支援のあり方を考える必要がある。 ③引き続き同窓会交流会の充実を図る。将来的には同窓生や保護者主体の同窓会の運営に向けて、学校がどのような活動や働きかけを行うべきか検討する。ただし、今後も進路指導部が主体となり運営すべきなのか、議論が必要である。

重点目標	達成（成果）目標	重点的取組	取組指標	P L S L	自己評価結果		次年度の改善策	学校関係者評価
					評価	分析・考察		
2 健康や体力の増進及び 安全教育の推進	○児童生徒の実態に応じた健康・ 体力づくりの実施率 100%	・児童生徒の体力づくりと怪我 や病気の予防 ①各学部の児童生徒の特性 に応じた、基礎体力の向上 及び健康の保持増進をお こなう。 ②学校歯科医との連携を図 りながら、歯と口の健康づ くりを推進する。	①全学部体力づくりを一週間を通じて朝 の時間帯に25分間設け、持久力の向 上を図る。 ②肥満の課題を持つ児童生徒は定期的に 体重を測定し、グラフ化して増減を把 握させ、肥満解消につなげる。 ③フッ化物洗口・塗布の継続と、歯みがき 指導、給食指導を総合的に関連づけて行 う。	P L 保健体 育主任 S L 養護教 諭	3	①各学部の時間設定で継続的に取り組むことが できた。内容についても学部の実態に応じた取り 組みができた。体力づくり週間では、全校一丸 で体力の向上を意識した取り組みが100%で きた。 ②養護教諭協力の下、各担任の指導で定期的な体 重測定をして、食事制限（給食）をするなどの 継続的な指導ができた。 ③毎週水曜日、各学部それぞれの時間設定で取り 組むことができた。高等部の時間帯に学校歯科 医の見守り指導があり、充実した取組が実施で きた。	①毎年、学部ごとに体力的な実態を考慮 しながら、活動内容、活動方法を決め 取り組む。 ②肥満傾向、運動不足傾向、体力低下傾 向の児童生徒を把握し、養護教諭の協 力の下、担任を中心に指導する。 ③児童生徒の実態に応じた形でフッ化物 洗口・塗布に取り組むと共に担任の歯 磨き指導も並行して行う。また、保護 者へのフッ化物洗口・塗布の情報提供 を行う。	・避難訓練を4回実 施していること は、準備がたいへ んだろうが、とて もよいこと。 ・飲料水や食料備蓄 の取組は、大切な 取組だと思う。災 害に遭ったとき、 人間は弱い。まし てや障がいのある 子どもたちは。取 組を継続してほしい。 ・防災アドバイザー という、第三者を いれて、マニュアル ルや訓練の実態を 見てもらい、改善 へのアドバイスを もらうことはとて もよい取組であ る。 ・職員が防災士の資 格をとると、防災 への意識が更に高 まるのではない か。 ・学校が4月から本 当によい方向に変 わってきている。 組織的な対応が、 よくできている。 ・先生方によい意味 での緊張感があり、 ピリッとしている。 校内がとてもきれい になった。
	○危機管理体制のマニュアル改 正。 ○防災アドバイザーを1回招聘。 防災訓練を見ての指導助言。 ○災害時等の緊急事態に対応す る、メール配信システムの導 入。	・危機管理体制の充実 ①児童生徒が落ち着いて安 全に避難できるような人的 環境及び物的環境を作る。	①緊急事態が発生する状況設定の変更を 段階的に行いながら、年間4回の防災訓 練を実施する。また、その中で、地域と の合同防災訓練を実施する。 ②中学部は2週間に1回、高等部は1週間 に1回、第2避難場所へ走って逃げる、 津波避難訓練の練習を行う。 ③災害用備蓄食料を食べ、災害に備えた体 験的学習を実施する。	P L 生徒指 導主任 S L 各学部 主事		3	①地震津波防災訓練については「自分の教室から の避難」「自分の教室以外からの避難」「抜き打 ちでの訓練」といった緊急事態発生時の状況設定 を学期ごとに変え、不審者侵入時避難訓練につ いては本年度は小学部への侵入を想定して実施 した。動けなくなったり大声をあげたりする児 童生徒もなく、緊急時への対応力がついてきて いる様子が見られた。いずれの訓練でも、事後 の反省を全教職員から吸い上げ、その中で、学 部の枠を超えた教職員間の連携（人的環境づく り）や、備蓄食料運搬用リュックの完備（物的 環境づくり）と、地震津波対応および不審者侵 入時対応のマニュアル改正を進めることがで きた。また、11月には、地域との合同防災訓練 を実施することができた。	
					4	②中学部、高等部とも、年間おとして第2避難場 所への学部避難練習に積極的に取り組むことが できた。特に、11月防災訓練後は、「ヘルメッ ト装着」「自分の備蓄食料を自分で運搬」を学部 練習にも取り入れることができた。 ③災害用備蓄食料を食べる体験学習を、全学部で 実施した。備蓄食料の内容を災害時の実情に合 ったものにするために、保護者との連携をもつ 機会とすることができた。 ④⑥防災訓練では、防災アドバイザーを招き、訓練 の状況を見てもらい、指導助言を受け、次の 改善点へといかすことができた。 ⑤災害時等緊急時の保護者への連絡方法確立のた め、メール配信システムを導入し、保護者の登 録を推進した。	③災害用備蓄食料についての情報を集 め、よりよい中身を更に追究する。備 蓄に適すると思われる食品について は、保護者に情報を伝えたり、「食 べる体験学習」を実施したりして、児童 生徒にとって最適な備蓄食料を探り、 整備を更に進める。	

総合評価 次年度への展望等	<p>○基本的習慣の確立のため「あいさつ」「清掃」「時間を守る」の3点をスローガンにした。児童生徒へは全校朝会で動画等を使用しての確認、絵入りの掲示物による呼びかけ、登下校時の指導、昼休みの清掃実施、授業規則の明示等、あらゆる場面で徹底して取り組んだ。職員へは、前述の児童生徒への取組を通じての意識の涵養をおこなうと共に、講師を招聘して接遇研修を実施することにより基礎的な知識の習得をおこなった。学校関係者評価委員だけでなく地域の方にも、あいさつの良さ、学校の美しさについて評価する声をもらった。</p> <p>○一つのことが徹底できることにより、他の課題にも職員が能動的に取り組むようになった。地域の関係機関と連携しての進路指導、同窓会組織の設立と実施、防災訓練と安全対応に係る様々な取組等、職員が考え、実施し、反省の中から課題を見つけ出して更に改善を進めていくという、PDCAサイクルが機能している。</p> <p>●次年度は、「あいさつ」「清掃」「時間を守る」の3点を更に徹底する。また、安全安心な学校環境を確立するため、防災教育を児童生徒と保護者へ進めていくと共に、具体的な想定に基づいた訓練を実施し、防災訓練の充実を図る。また、授業力の更なる向上をめざすため「わかる授業」を一つのスローガンとして、視覚的支援や教室環境の構造化等の研修を進め、児童生徒の自己肯定感を高め、情緒指数（EQ）の向上を図る。</p> <p>●特別支援教育の理解と啓発を図るため、特別支援教育の情報と特別支援学校の取組を佐伯市全域へ発信する広報活動（HP、テレビ、新聞等）の充実を更に図る。また、小中高の各学校との交流及び共同学習の推進、一般企業、福祉事業所、行政等関係諸機関との連携による適切な進路の保障等、地域とのつながりを大切に取組を継続し、推進していく。</p>
------------------	---